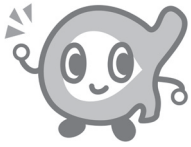


胃を切った人の情報紙

令和7年9月
第473号



ALPHA CLUB

「胃を切った人 友の会 アルファ・クラブ」は、胃を切った人が自らの努力と工夫で術後の後遺症を克服していくことを支援しています。Web サイトもご活用ください。

胃を切った人

検索

<http://www.alpha-club.jp>

■代表理事
青木照明 (東京慈恵会医科大学 客員教授)

■理事
足達洋六 (アルファ・クラブ 個人会員)
上西紀夫 (東京大学名誉教授)
鈴木 裕 (国際医療福祉大学 病院 院長)
高山美治 (医学ジャーナリスト)
梨本 篤 (新潟西浦メディカルセンター 病院)

どんなことにも感謝

43歳で余命宣告を受け、今年76歳になりました。がんで胃をなくしてもこうして生きていられることは、私には奇跡としか思えませぬ。大病になる前にはなかった心のありよう、すなわちどんなことにも感謝したくなるという、心の変わりようにも感謝です。

がんになるまでは病気とも無縁で、体に留意することもなく暴飲暴食、ヘビースモーカーという不摂生三昧の毎日でした。

ところが、胃を全摘してからは、それまで自分を取り巻いていた外界が一変し、同時に心も変わったような感覚を覚えたのです。それまでは自分が自分

がでやってきたのが、自分以外の人たちの助けがあつてこそ、こうして生きていられ、仕事もできるのだということに気がついたのです。それからどんなことにも感謝する気持ちになりました。

また、体に備わっている臓器は、私たちの意思には関係なく黙々と働いていることにも、いまさらながら考えを巡らせたしたいです。腸は胃がなくなっても、文句もいわずに未消化の食べ物を引き受けて、あたかも使命感に駆られた律儀な人間のように、働いてくれているのです。

あるふぁ随筆

病がくれた贈り物



やまだ 修治

肺は私が眠っている間も呼吸をしているし、心臓も昼夜を問わず鼓動している。すべての臓器は、私が生まれたときから一度たりとも休むことなく、この体と命を維持するべく、働きづめじゃないか。なんといいらしくありませんが、腹の底から湧き上がってきました。

胃がなくても生きていける

臓器の一つひとつが、私を支えてくれている慈愛に満ちた人々のように、思えたのであります。

それに加えて、病を抱えた人も健康な人も、平等に命と体を「授かって」いる。みんな一生懸命生きようとしている。生きたいのだ。こ

若い頃から「生かしていただいている」という言葉を、目にした

ところが今では、ピンときてばかりなのです。がんの再発がなかったことに対してはもちろんですが、胃がなくても生きていけることに、年を追うごとに感謝の念が強まってきました。アルファ・クラブの会報の記事にも、大いに励まされたものでした。

若い頃は、何ごとも自分の力でやっていると上がっていた私が、現在では「不思議な力に生かされている」というありがたさで満たされた毎日です。がんになり、胃を全摘してからは、どんな些細な出来事もかけがえのない贈り物に思えるのです。

「自分を取り巻くすべてに心から感謝しつつ、老いに謙虚に向き合い、残りの人生をひたすら味わいつくすぞ!」

座右の銘になりました。

作家 (第5回室生犀星賞受賞)

嶋野 直接お話しできるのは良いことですが、「ひろば」は時間や場所に制約されずに利用できるのは便利だと思います。私も投稿してみました。反応がないとさみしいですね。

岩佐 似た症状や悩みを持つ人がここで会話ができれば、ものすごくありがたいでしょうし、非常に価値があるサイトだと思います。ただ、動機がないと入りにくいですね。

■簡便にアクセスがしたい

森本 私はスマホで見ようとしたのですが、ログインしたあと「ひろば」になかなかたどり着けませんでした。もっと簡単に入れると良いですね。

足達 一番簡単なのは、「ひろば」にたどり着く会員専用のEメールシステムのアイコンをつくって、そこに誰かが投稿すると会員全員に通知が入ってくる。それを見て、返信できるならするというシンプルな仕組みが良いと思います。そこを少し考えてみましょう。

■専門家によるフォローアップ体制の確立を

岩佐 会員同士のやり取りだけでなく、医師や栄養士さんなどのアドバイスもほしいですね。
足達 医療の専門家でないところからない内容には、専門家からのアドバイスが必要不可欠だと

考えています。それがないと長続きしないですね。

しかし、本会にはタイムリーに専門家のアドバイスを出す組織システムがありません。

私が先般、新潟県立がんセンター新潟病院を訪ねた理由はそこにあります。同病院ではそういったフォローアップを行う組織のシステムができあがっています。非常に素晴らしいのは、術後1年間に5、6回も食事相談を行っています。

そこに以前いらしたやぶさきひろし藪崎裕先生と後任のやぶさきひろし會澤雅樹先生にお会いして、新潟県立がんセンターが持っている組織システムで、一時的な支援をしていただくことをお願いしてきました。

つまり「ひろば」への質問に対して、本会事務局を通じて新潟県立がんセンターの専門家からアドバイスをいただき、それを質問者に返す仕組みです。

その次の段階は、円滑にアドバイスをするためのフォローアップ組織の確立です。そこで3つのアドバイザリーグループが必要と考えています。

1つは、胃切除後は食の問題が非常に大きい。この食事管理

のアドバイザリーを、会報にも執筆いただいている佐川まさの先生にお願いしたいと思います。

2つ目は、術後の身体的な後遺症です。これは多岐にわたっているもので、数名の先生にお願いし、どなたかに中心になっていただき、幅広くアドバイスをできるようにしたいです。

3つ目は、精神的な面も含めたQOLと体力・筋力強化の面でのアドバイスグループです。

そういったバックアップグループがあつて初めて「ひろば」が充実し、広く利用されてくるのではないかと考えています。

■アルファ・クラブの使命

宮崎 抗がん剤ティーエスワンの副作用で流涙症になったときにメーカーの大鵬薬品工業に問い合わせたら、すぐに話を聴いてくれました。その後、薬の添付文書を改訂し、がん担当の医師や眼科医に情報提供しているとのことでした。後日、眼科の主治医から「あなたのこと、大鵬薬品から報告がありました。患者さんの生の声を製薬会社が届けるのはとても有意義なことです」といわれました。その後、

流涙症の患者は少なくなつたということでした。「ひろば」にそんな例が出てくれば取り上げて、会として医師やメーカーにいうべきだと思います。

足達 胃がないのは、実はすごいハンデですが、厚生労働省では障害の範ちゅうに入れていない。そういう面で、本会も問題を提起して声を上げていけば、医療は改革されると思います。改善が難しいことで困っている方があれば、宮崎さんがいわれたように、医師のグループと一緒に、厚労省に働きかけることも必要だと思います。

岩佐 会報で鈴木裕先生が書いていますが、医師のほうは手術がうまくいって治っていると思っても、患者のほうはまだまだなんです。そのギャップを、お医者さんに知ってもらうことも価値あることです。

足達 病院にとっては、財政的な面で保険や国の支援がない診療は避けたいのが本音です。その治療が保険に収載されれば病院も対応します。そこは、皆さんが声を出していくことが必要であると考えます。

(次号に続く)